



もし

ツンデレお嬢様が 我が社の社長 になったら

小説 Kyphosus

挿絵 K子

立ち読み版

プロローグ 連鎖倒産の朝

第一章 美少女鬼社長、登場

第二章 チョイと一杯のつもりが……

第三章 巨乳秘書の誘惑

第四章 エッチな成功報酬

第五章 社長机の秘密

第六章 倉庫でご褒美

第七章 名門一族の現実

最終章 はじめての共同作業

登場人物紹介

Characters



か また ひ お
華俣 緋緒

ノリヤマ商事の社長になったお嬢様。飛び級で大学を卒業した才女で、シビアだが合理的な判断力で会社を引っ張る。キツイ性格で部下を叱咤するばかりで褒めるのが苦手。



か わ ぐ ち り り あ
川口 凛々亜

緋緒とともにやってきた巨乳秘書。色気と知性を兼ね備えた大人の魅力溢れる女性。落ち着いた性格で緋緒やミツルらを的確にサポートする。



こ づ く え
小机 ミツル

商品開発部の平社員。平凡な安定志向の独身男だが、一度火が付くと絶対に折れない強い心を持っている。

そう言つてミツルの胸の前にまで踏み込んでくる。そして彼の体臭を味わうかのようにすうう、と鼻から大きく息を吸い込み、瞳を妖しく潤ませた。

一方、半裸の少女に詰め寄せられた青年の体温も急上昇した。彼女の剥き出しの肩から、胸元から、頭から、春の花のような甘く切ない匂いが、暖かく包み込んでくるのだ。脈が速まり、皮膚が汗ばみ、ズボンの中の欲望器官が脈動し始める。

「え、マ、マジで……おおっ？」

ミツルは絶句した。いきなり緋緒がしゃがみこみ、彼の股間に触れたのだ。

「うっわ、何これ……アンタつて本当にエロなんだ……」

下を向くと、一瞬でキツキツに膨らんだGパンの前を、目を丸くしながらおそるおそるといった態度で撫でる緋緒が見えた。彼女がぐくりと唾を飲み込む。

「……ズボンがパンパンじゃないの……何でこんなになるの、このエロ社員？」

呆れたような、感心しているような口調だった。股間前に陣取りながらも、ちらちらと視線をミツルの顔にも向けてくる。

「いや、だって社長、そんな格好で……その、ええと、魅力的だからです……よ」

ミツルは下半身に滾る本能の声を、比較的上品な言葉に翻訳して答える。すると緋緒は目をぱちくりとして、それからもう一回にと微笑んだ。安心したような、喜んだような、期待するような、満足したような、女らしい表情で。

「そ、そう？ そっか……ふふっ、じゃあ……ご褒美、あげるわね……」

後半は今まで聞いた事のない低い声だった。その声を聞いて、ミツルの身体を、ぞくぞくするような予感が駆け巡る。巨乳秘書のときよりも強く。

「ご、ご褒美なんですか……?」

「そうよ。これはご褒美なんだからね。人を使うにはムチだけじゃなくてアメも必要ですよ。だから……か、勘違いしないでよ……スケベなアンタ向けのご褒美上げるだけなんだから」

白い指がベルトの金具に掛かった。

「えっと、こ、こうかな?」

少女は金具を何度かかちやかちやと音を立ていじって、青年の腰のベルトを外すのに成功した。次に慣れない手つきでズボンのボタンを外していき。

「お、お、お……下ろすわよ、ズボン……」

緊張しきった、妙に真面目な顔で言う。彼もつい釣られて緊張してしまう。

「ど、どうぞっ……」

「えいっ」

ずるっ……!

パンツごと一気に床まで引き落とした。ズボンの中の熱い空気とともに、限界まで膨張した海綿体が反動で跳ね回りながら飛び出す。

「ひっ……っやつ、やだっ……こんな、大きいのっ!! 動いてる……真っ赤で、ごっごっ

してて……ど、どうしようっ、こんなの……」

緋緒は目をまん丸に見開いて後ずさった。裸の肩が震えているのが見える。

「えっと、あの……無理しなくても、その……いいつすよ」

尻餅をつく格好のお嬢様の動揺っぷりに、青年は紳士の本能を抑えて声をかける。彼も無理強いする気はないのだ。だが。

「ばっ、馬鹿っ、別に無理なんかじゃないわよっ、この程度っ！ 本物は初めて見たから、ちよっとびつくりしただけ！ そ、それじゃいい？ いくわよ」

気配りは気位の高い彼女には逆効果だったようだ。キッと睨み返すと、再び彼の怒張の前に跪く姿勢を取った。おずおずと手を伸ばして、そっと触れる。雁首の裏側をそっと撫でられて、青年の背筋をぞくりと愉悅が走る。

「……ご褒美、これにあげればいいのね……あ、やだっ、今びくってした……」

大きく目を見開いてまじまじと見つめながら、雄の屹立を撫でまわす。少女の肩が上下して、ごくりと唾を飲む音が聞こえた気がした。

「こんな風なんだ……すぐく堅いのに滑らかで、熱くて……それに、変な匂い」
それから彼女は、視線を上げてミツルの顔を見た。

「えっと……じゃ、じゃあ……お願いします……」

自分でも何だかよく分からないお願いだったが、緋緒は妙に真顔で頷いた。

「……うん……」

そして、きゅつと目を瞑^{つむ}り、桜色の唇を一杯まで開いたかと思うと。
かぷりっ……。

「んむっ……っ……」

「おおおっつ、しゃ、社長っつ……」

彼のペニスは、その半ばまで少女の口の中に含まれていた。亀頭全体をじわりと染み込むような温かさが包む。肉幹に歯が軽く当たり、唇が締め付ける。鋭敏な裏筋に舌が擦り付けられる。

（口で……フェラチオしてもらってる、俺……おおっ、あんな小さい口なのに、大きく開いて……すげえ……ああ、あったかくて……）

ただ含んだだけなので、物理的な刺激は大したものではないのだが、年下の美しい上司に口で奉仕してもらっている、という精神的な快感は強烈だった。脳から溢れ出る汁のせいで脈拍は急加速し、胸の中が火がついたように熱くなる。

「はっ、はあっ、社長……いや、緋緒っ……すごい、嬉しいですよ……はっ」

ミツルが興奮した声色でうめくと、フェラチオ中の緋緒は愛らしい唇に醜惡な肉柱を銜^{くむ}えたまま髪の毛をかき上げ、何か文句があるような目つきで彼を見上げた。

「ん、んっ……何？　ちゅぷっ、ちゅるっ、あ、動いて……ぬちゅっ……」

それからゆっくりと頭を前後にグラインドさせ始める。同時に舌もうねうねと裏筋を這い回り出す。じんと疼くような快美感が海綿体に流れ込んできて、彼の陰囊から肛門

にかけての筋肉がくつと引き締まる。

「あつ、おおつ、いいです、気持ちいい、緋緒っ……吸って……おお……」

いつの間にかタメ口になっているミツルがアドバイスすると、彼女は赤い頬をへこませて素直に吸引を開始した。グラインドも続けているため、唇と剛直の隙間から淫らな音が漏れ出してくる。

じゅるるるっ、じゅぷっ、ぬぶっ、じゅぶるるる……。

吸引の陰圧により薄皮が引っ張られて性感神経の感度が上がる。そこが少女の滑らかな口蓋に擦られ、痺れるような愉悅がミツルの脳内に進っていく。わずかにざらつく舌の腹がペニスの裏筋を強く舐め、びりびりと快楽の電気が流れ出す。

「んうっ、んっ……あ、びくびくしてきたわ……んぶ、んんっ……」

視線を下ろすと、美少女上司の桜色の唇から、節くれ立った醜幹が引き抜かれて出てくるところだった。唾液にまみれて赤紫色に光る亀頭が覗くまで後退すると、お嬢様は再び顔を前へ進め、上品な口元でグロテスクな雄器官を飲み込んでいく。

（社長が、セレブお嬢様の緋緒の口に、俺のが……おお、鼻血が出そうだ……）
その落差に、彼の興奮は一層強く掻き立てられ、思わず腰を突き出してしまふ。

と、奉仕している緋緒と目が合った。苦しいのか目元にわずかに涙を浮ばせているけれど、にっと笑ったような気がした。嫌々やっているような様子ではない。

「はっ、おおっ……いいよ……く、唇も使って、緋緒……」

欲をかいて注文を出すと、彼女は一瞬不機嫌そうな表情を見せはしたものの、言われた通りに舌と喉に加えて唇の動きで肉柱を刺激し始めた。頭のグラインドとは別に、食むように唇に力を入れて動かす。海綿体に圧力を加えられて、ミツルの付け根のあたりに熱い切望が流れ込んでいく。

願いを聞いてもらえた嬉しさに、ミツルは思わず手を伸ばして彼女の滑らかな垂麻色の髪を撫でた。頭を撫でられた緋緒も、まんざらではなさそうに微笑む。

「んっ、んんっ、むー、そんな撫でる位れ……んっんん、んんっ、んっ……」

じゅるっ、じゅぷっ、ぴちゅるるっ、じゅぷっっ、じゅっ……。

緋緒のほうも興奮しているのか、真っ赤な顔で涙目になりながらもグラインドのピッチを速めてきた。お嬢様の可憐な唇から零れ出す、品のない粘着質な水音が殺風景な社長室に響き渡る。

「おお、おおっ……緋緒、次は回転……左右にひねりを入れてみて……」

すっかり遠慮のなくなったミツルは恐れ知らずにも注文をつける。

「ん？　こう？　んん、んむっ……じゅるるるっ、じゅぷっ、じゅるるるっ……」

指示を理解した緋緒は、今度はペニスを吸いながら頭をゆつくりと傾げるようにして、右に左に、回転の刺激を加え始めた。

「あうっ、んんっ……いいよ緋緒、気持ちいいよ……ああっ、舌で……舌でカリの裏をなぞってみて……おおっ、うん……そう、いいよ、気持ちいいよっっ」

言われるがままに、乙女の小さな舌が、肉笠の張り出しの下のかげをきゅとなぞっていく。ミッルが、鋭敏な神経の密集するカリ裏への熱い刺激に思わず歓喜の声を上げると、それを聞いて緋緒も楽しげに微笑んだ。

ちゅぱっ、ちゅっちゅぱっ……じゅるっ、じゅぶっ……。

じゅるっじゅるじゅるっ、じゅぶぶ……びちゅっ、じゅるるる……。

やがてコツが分かつてきたのか、緋緒は自発的にフェラテクを使い分け始めた。亜麻色の髪を振り乱して前後にグラインドを掛けたかと思うと、止めて強く吸い、それから右に左に首を傾けてひねりを掛けながら舌で舐め回す。

「おおおっ、いいっ、凄いいっ、凄い気持ちいいよっ緋緒っ……も、もうっ俺……」

刻一刻と高まっていく快楽に青年は全身を震わせながら叫ぶ。美少女の口唇奉仕という精神的快楽、社内で淫らな行為に耽っているという興奮も相まって、ミッルは限界に近づきつつあった。少女社長の口内で、ペニスがひと際大きく膨らむ。

「はっ、うっ、出るっ……緋緒っ、俺そろそろ、はっ、はっ……出そうっ……」

「んっんっ？ れる？ わはったわ、んっ、んむんっ……」

その申告を受けた緋緒は肉器官を銜えたまま頷くと、何を考えたかグラインドのピッチを上げた。

じゅっじゅぶぶじゅぶぶっっじゅるっじゅぶっ……。

はち切れそうな勃起に急ピッチの強い刺激を加えられて、ミッルの身体中に高圧電流の



ような灼熱の愉悅が暴れ回り、脳内に真つ白な火花が飛び散る。

快感を堪えて薄目を開けると、熱烈に頭を動かしている緋緒の姿が見えた。真つ赤に染まった頬を大きくへこませ、汗ばんだ額に髪の毛が張り付いている。一杯に開いた桜色の唇が赤黒い醜茎を飲み込み、また吐き出す。

彼の視線に気づいたのか、彼女も瞼を開いて見返すと、目元だけでにと笑った。なんとも愛らしく、なんとも淫らがましく、まるで精液を欲するかのように。ミツルは口の外に出すつもりだったのだが、乙女の妖艶極まる奉仕態度に、そんな紳士の余裕は消し飛ばされてしまっていた。

「あつあああつそんなつ、おおおおつすごいつつ……緋緒つ、いい、いいんだねつ、緋緒つ……口に出しても……うつおとおおつ……っつ」

そしてすぐに限界が訪れた。ペニスの付け根の奥、肛門と睪丸の中間あたりの体内輸精管を、落雷のような強烈な快楽が襲う。青年は背中を仰け反らせ、腰を大きく突き出すと全身をがくがくと痙攣させて、次の瞬間。

「も、もう出るっつ、出るよっつ緋緒つっおうううっつ……」

びゅぶつっつびゅるるるるるっつ……!!

雄器官を内側から焼き尽くすような、白熱の快楽が駆け抜けていく。

「~~~~っつ！ んんんむむぶぶふっつんん~~~~っ!!」

突然口内で弾けた未知の体液に、緋緒が声にならない悲鳴を上げた。目を大きく見開き、

身体を硬直させる。だが、その口はミツルの絶頂器官を放さない。

びゅっっっ、びゅるるるっっ……!!

「おおおおっっっ、緋緒っ、緋緒っ……!!」

青年は絶叫しながら、乙女の清らかな唇の奥へと第二弾、第三弾の精液を打ち込んでいく。口の端から唾液と混じり合った白濁が溢れ、顎まで伝い落ちる。

びゅぶっびゅるるっ、びゅるっ、びゅくっ、びゅっ……

射精はたっぷり十秒は続いたろうか、ようやく終了すると、ミツルは息を弾ませながら、ペニスを引き抜いた。

……ぬぼっ……

「んふっ……んっ……んんっ……」

すると緋緒は桜色の唇を閉じ、眉をしかめてぎゅっとな目を瞑った。

「はあ、はあ……あ、緋緒っ、これ……ほら、ここに吐いて……」

ようやく相手を氣遣う余裕を取り戻した青年は、床のズボンからティッシュを取り出して差し出したのだが。

「んんんんっ……んん、んんんんっっ」

ごくんっ。

大きく喉を鳴らして、口内一杯に放出された欲望を飲み干してしまったのだ。

「……の、飲んだんだ……」

ぬぶるっ……。

+

緋緒はようやくミツルの充血組織を解放した。顔を上げると、濡れた唇と虚ろに屹立する先端との間に唾液の橋がかかり、途切れる。

「ふう……ねえ、まさかこの程度で満足しちゃったりなんて、しないわよね？」

ミツルの顔を覗き込むようにしながら、瞳を淫らな期待に輝かせ、甘い低音で囁きかけた。息を荒らげた状態の彼がそれに応えるまで、しばしの間があった。

「はあっ、はあっ……う、うん……あ……え？　うわっ……」

不意に目に飛び込んできたミルク色の生脚に、動悸の治まらぬ心臓が跳ね上がる。いつの間に脱いだのか、彼女の下半身は裸だった。向かいの棚の下段にいつもの鈍紅色のスカートと黒いパンスト、ショーツの純白が見える。

緋緒の青灰色の作業服と純白のブラウスの下から直にすりとした脚が伸び、そのつま先の一旦脱いであら履き直したらしいハイヒールが、非日常的なエロスを著しく増幅している。お嬢様社長は素足を、動悸の治まらない彼に絡ませてきた。

「どうせ次は……こっちのご褒美が欲しいんでしょ？　エロで頭が一杯なアンタの考えることなんて、お見通しなんだからね」

「うう……は、はい」

彼女の誘導に、頭に血がのぼったまま頷いてしまう。

「あつほら、また大きくなった！　びくんびくんして……ほんと、エロ馬鹿」

緋緒は、愛犬の忠誠心を喜ぶかのような笑顔でミツルの反応を嘲笑する。それから身体を離すと後ろ向きになり、向かいの棚に掴まって腰を突き出してきた。亜麻色の長髪が流れ、作業着の無愛想な青灰色の下からいきなり、滑らかな曲線を描く美尻が白く輝いている。スレンダーな体型に見合ったスポーティな細腰には凛々亜ほど迫力はないが、健康的で生命力に満ち溢れた魅力を放っていた。

「ほら、おいで。何してるの……はやくう」

緋緒は髪を揺らし、桃色に染まった頬を背中越しに向けてくる。ミツルは夢うつつのようにふらりと前に出て、彼女の丸いお尻に手を添えた。傷一つなく滑らかな肌は、愛撫すると吸い付きそうなほど柔らかいが、よく運動しているのだろう、筋肉性の弾力に富んでいて、手をしっかりと押し返してくる。

「うんんっ……」

じれったそうに彼女が腰を軽くねじり、お尻を揺らす。ミツルは無言のリクエストを理解したような気になって、しゃがみ込んだ。そのまま目の前の二つの臀球の合間に顔を寄せ、亜麻色のわずかな茂みに飾られた濡れた肉唇に接吻した。

ちゅっ、ちゅ、ちゅぷっ……。

「あんっ、そ、そんな褒美っんんっ……よかったの？　……ふあっ、あっ……」

やや開きかけた花卉に軽いキスを浴びせていくと、少女は待ちかねたような嬌声を漏ら

した。もつと口づけしやすくなるべく、大胆にも片脚を持ち上げると膝を棚について、太腿の開き角を広げてくれた。視界に入ってきた生脚ハイヒールの赤色が、彼の欲望にアクセントを添える。

ミッルはそのまま接吻を進めて、肉花の先端の膨らみかけた淫核を捉えた。

ちゅっ、ちゅっちゅちゅっ、ぶちゅっ、ちゅ……

付け根のあたりをソフトについばみ、先端に向かってゆっくりとキスしていく。

「あふっ……あああつ……そ、そこっ、そうっ……んんっ」

鋭敏な部位への刺激に、滑らかな太腿がぴくんと強張り、白尻がぶるつと戦慄いて反応する。目の前の肉唇がひくひくと震える。少女の声も、荒い吐息混じりの震え声に変わっていく。つつあった。

ちゅるっ、ちゅううっ、ちゅっ、ぶちゅうううっ……。

「……そっそれっあああつっ、なんか、ビリビリするっつ、いいっ、いいのっつ」

充血した肉芽を唇で吸い込み、舌先で転がしてやる。お嬢様社長の膝がぐくぐくとおのきの、腰が不規則にうねりくねる。愛核も舌のうえでぶっくりと膨れ上がっていく。ひとしきり先端を舐め吸って身悶えさせると、今度は唇を彼女の雌蜜溢れる真芯へと移した。わずかに甘い不思議な味が舌上に広がる。

れるっ、れるるるっ、ちゅっ、ちゅるるっ……。

「やっ、やだっもうっ、んんっ……そんな舐めないでよっ、あつ、ふあつ、もうっ、んんっ」

そうは言うものの、もっと舐めて欲しい、感じさせて欲しいとでも言うかのように腰が動き、濡れた淫唇を奉仕する青年の顔面に、はしたなくも押しつけてくる。

彼は応えるように舌先で秘庭を突き、肉弁を唇で掻き分け、粘液のわき上がる熱泉を舐め上げる。同時に手を伸ばし、太腿から膝の裏までゆっくり撫でさする。

（ああ、緋緒……可愛いよ……こんなに腰、押しつけて……でも、これだと……）

彼は愛しい雌器官に舌を蠢かせ、唇を這わせながらも、不満を覚えていた。もっと胎内の奥深くまで愛したい。そういう欲求で一杯なのだ。

ミツルが顔を引くと、緋緒は愛撫の停止に不満げな声を漏らした。

「やん……どうしたの？」

「緋緒、俺……もう緋緒と繋がりたいよ……緋緒の中、深くまで……」

エロ社員は上体を開き、腰をずらして見下ろしてきた彼女に、屹立したままの剛直が見えるようにした。

「つつ、繋がっ……！　そ、そんな言葉、もっとオブラートに包みなさいよ……ああもう、仕方ないわねっ……そんなに、私と……っ、繋がりたいの？」

それなりに言葉を選んだつもりだったのだが、まだお嬢様にはダイレクトすぎたようだった。しかしそんな彼女の頬は弛み、目は快楽を約束する赤紫色の頭部に釘付けだ。声色もむしろ率直で直截的な彼の愛情表現を喜ぶかのよう。

「ええと、正常位と対面座位はしたから……じゃあ、この格好のまましてみよっか」

そう言うのと緋緒は挑発的に、剥き出しのお尻をくねらせた。棚に乗せた片脚を揺すって、赤いハイヒールで手招きする。そしてその中央では、今しがた舌で堪能したばかりの充血器官が妖しいぬらめきとともにゆっくりと開閉していた。

「あ、こら、そんな見てないで。ほら、早く私と、その……っ、っ、繋がる？」

羞恥と興奮に震える声。肩越しの、おねだりするかのような視線。請われるがままに青年は立ち上がると、彼女の震える小さい背中に覆い被さった。スレンダーでしなやかな腰を掴み、痛いほどの勃起ペニスを彼女の真芯にそのまま押し当てる。彼は己の先端に、熱く脈打つぬかるみの存在をはっきり感じとった。

「……んっ……うん。いくよ、緋緒……っ」

うわずった声で囁く。作業着の肩の向こうで、少女の目が欲情しながら微笑む。

足腰に力を込めると、彼は一息に押し込んだ。

ずぶぬぬっ……。

入口を守る括約筋がわずかに抵抗したあと、その先に続く体腔の、やや下向きな角度に合わせて彼自身の進行方向を調整してくれる。押し込むと、熱くぬかるむ粘膜の中にちょうど亀頭全体がはまり込む。

「ふあああああ……は、入ってきたっ……」

しかし、鋭敏な薄皮を包み込む肉壁の抱擁に飽き足らず、彼はさらに腰を押し進めた。張り出した海綿体の笠で、暖かく柔らかな肉の道を掻き分けていく。幾重もの柔らかなゴ

ムの輪をくぐり抜けていくかのような、弾力に富んだ鮮烈な愉悅が膨張しきった勃起に響いてくる。

やがて彼のペニスは根元まで緋緒の性愛器官に飲み込まれた。複雑に入り組んだ彼女の胎内は、暖かく瑞々しく柔らかく、場所によつてはわずかに堅く、剥き出しの亀頭を、くびれの周りの褶曲した薄皮を、節くれ立った雄幹を抱擁する。

「ああ……繋がった……ほら、俺たち繋がってるよ、緋緒」

結合の温かさが嬉しくて、ミツルは緋緒の耳に唇を寄せて囁く。

「やあつ、つ、繋がっちゃってる、私……あんな太いの……中まで……んっ……」

彼の指摘に恥じらうかのように、少女の柔肉組織はぎゅっと収縮し、はまり込んでいる怒張を締め付ける。腰がぐいっと揺さぶられ、無数の肉襞と海綿体を擦れ合わせる。その刺激に、肉柱を支える熱血中で無数の歓喜が生じては弾けた。

「ふううう……じゃあ動くよ、緋緒……」

そう告げてから、ミツルは高鳴る心臓の命ずるまま、腰を動かし始めた。

ぐぶぶぶつつ……。

粘液音を立てながら引き抜く。亀頭の張り出しが矢じりのように内壁を引っ搔いていき、その刺激に緋緒の腰がぶるぶると震える。

ぬぶるるつつ……。

媚肉の中から姿を現した、愛液にぬらつく幹を再び押し込む。

「んあああつつつ……くあつ、大きいのつつつ広がつちやうつつ……」

再度の進入に緋緒は肩をすくませて小さな嬌声を上げる。根元まで埋もれ込むと彼女の胎内は一旦緩み、すぐさま緊張するかのように締め付け直してくる。

ぐぱつつ、ずぬんつつ……！

「あうっ……ひっあああああつつつ……！」

次は勢いよく引き抜き、突入させる。抵抗する肉管をこじ開けるようにして打ち込むと、亀頭山腹が複雑な内部構造と次々と潤滑摩擦して、彼の背筋を強い歓楽が走り抜けた。奥まで到達した時、接合部から熱い粘液が溢れ出し、泡を立てながら少女の白い生脚をハイヒールまで伝い落ちる。

……ぶちゅっ、ずばんつつ、ちゅぶるつつ、ぱんっ……。

肉のぶつかる音を響かせながら、ミツルはピストン運動を速めていく。打ち込むたびに緋緒の背中が仰け反り、引き抜くたびにお尻が震える。彼の怒張も粘膜が擦れ合う快楽に熱く煮えたぎり、全身に本能の衝動を伝えてくる。

一方お嬢様は、細尻を貫かれながらも首を仰け反らして彼を見つめてきた。

「あつああつ、ああつもうっ、そんなに腰振って、ア、アンタだって、犬みたいっ……この、このエロ犬っ……んんっ、んちゅっ……んむっ……」

夢中で腰を振る彼に甘い声で罵りながら、片腕で頭を捕らえてキスをねだる。青年は下半身を弾ませつつ、彼女の唇を情熱的に食った。舌を絡め合い、唇同士を交わらせる。し

かし、さすがに有酸素運動中だけあって、口づけはすぐに離れてしまう。

「んん……ぷはっ、はっ、はあっ……んああんっ……」

そこでミツルは不意に、言葉責めへの意趣返しをしたくなった。

「はっ、はあっ……緋緒、緋緒も可愛いよ……エロくて可愛い雌犬だよ」

耳元に口を近づけて、ドッグスタイル故の愛の罵倒を囁いてやる。すると、雌犬という言葉への、お嬢様の反応は激烈だった。

きゅううううううつつ……。

彼女の中が激しく収縮して締め付けてくる。瞳が焦点を失ってとろんと蕩ける。

「あ……はううっ、私、わたしもっ……犬……アンタと同じ、エロ雌……う……」

喜ぶような、怒るような、情けないような入り交じった表情で、お尻を、背中を、肩をぶるぶると震わせる。やんごとない名門のお嬢様だけあって、自分から口にしたくせに、犬呼ばわりされたのがよほど精神的なツボに入っただけだった。

「あっああっあっあっ、あうっ……よ、よくもわ、私を犬っ、雌犬呼ばわりつつ、アンタっこのっあっあああっ……こんなっ、許さないんっっんんっ……」

とぎれとぎれの言葉尻こそ侮辱に憤ってみせてはいるものの、既に緋緒の瞳も、口元も、声色も、雌として獣のように組み敷かれ、犯されるといふ被虐的な快楽に陶醉しきっていた。彼女の身体も、突かれるたびに自ら腰を揺すり上げ、より深く飲み込もうとする。秘肉の奥底からはおびただしい粘液が溢れ出し、繋がったペニスの鈴口から、頭部の薄皮か

ら染み込んでくるかのようだった。

じゅぶつ、じゅばつ……とんつ。

そうして押し込んだとき、不意に彼の先端に今までと違う感触が訪れた。

（ああ、ああ……あつ、何か当たった……堅くて、弾力のあるの……もしかして、これがそうなのかな……凄いな、興奮しきってるんだ、緋緒……）

「緋緒、ほら当たってるでしょ……子宮だよ、これ。緋緒の子宮口、降りてきた」

言葉責めのせいかな、彼女の発情の度合いは非常に高まったようだった。青年は情報でしか知らなかった女性の神秘に感動し、うわずった声で囁く。そして深々と繋がった状態で腰を左右にひねり、先端部でコツコツとノックしてやる。

「あああつやつあつ……私っ、当たってるっ、当たってるのっ……アンタのっ……子宮にっ……ああっ犬、犬になっちゃうっ、エロっ雌犬っああおおおんっ……」

胎内深くに秘めた女性の尊厳を部下に触れられた。その指摘に、少女社長は髪を振り乱して叫び声を上げ、惑乱した。

そんな彼女の有様に、エロ犬社員の興奮も高まっていった。暖かく柔らかく、リズムカ
ルな締め付けと摩擦を受け続けて、彼の快楽も限界が近かった。鼠蹊部の底で熱い衝動が
決壊寸前にまで吹き溜まっていて、ペニスの尿道や裏筋周りの海綿体が射精に備えて熱く
膨らみ出す。

「ほらっ緋緒もっ腰っ、俺と一緒に腰使ってごらんっ、もっどっ雌犬みたいにさっ…



…ほらっ、おおっ、声もつすつかり犬の発情っ声だよっ緋緒っつおおっ」

「ああああっ、そんなっおおおんっ、雌っ私っ、わたしっ交尾されてるっ私も
うっ、犬っ雌犬つきもちっ気持ちいいのっつっおおっ、んおおおんっ!!」

エロ社員が囁きかけると雌社長も腰をくねらせ、交尾器官を受け止めるようにお尻を突き上げ始めた。

じゅぷっじゅんっつじゅばっぶちゅっ……。

ばんっばんっばんっばんっばんっ……。

二人の運動速度が一気に加速し、ラストスパートを掛け始める。火照った肌から、床や周囲の箱に汗の雫が飛び散っていく。

「あああああっ、種付けっおおっ私っ交尾されちゃってるっ、あおっおおっ凄
いっ、犬交尾凄いいっ……あああっ、中っ射精^だしてっ……私っもう雌犬っ……おおっ
雌っ……私っアンタの、雌にしてええええっ……」

激しい肉交と被虐的興奮に、お嬢様は今やすっかり雌犬になり果てて、あらもない言葉
を叫んでいる。

きゅっ、きゅうっ……きゅうううううっ……。

彼女の性愛器官もひと際きつく収縮を繰り返し、頂上が間近なことを告げる。

「おおっおおっ出るっつっおうっ出るよっ……緋緒っ緋緒の中につっ……出るよっ
……精液っつおおおっもうっ……!!」

雄叫びをあげながら、子宮まで貫けとばかりに白尻に腰を強烈に打ち付けて。

っぐぱんんんっつっつ！

……びゅぶるっつ……びゅるるるるるるるるるるっつっつ……！！

彼は落雷のような歓喜を解放した。細腰を強く掴み、足腰をがくがくと震わせて、愛しの雌肉を深々と貫く剛直先端を、子宮口に擦り付けながら射精する。脳内を真っ白に染める恍惚に全身の筋肉を痙攣させる。

ぶびゅっ、ぶびゅるるるるるるるるるるるるるるるるっつ……。

「ああおおおおおっつっつっつ……出てるっエロ犬の精液っおおおんっつ熱いの、どくどくっつ気持ちいいのっ出てるっつ……射精っ犬っ私っエロ犬に種付けされてるっ……気持ちいいっ、気持ちよすぎてっつエロ雌犬になっちゃうっつ……！！」

緋緒もまた、絶頂と同時に熱い精液を注ぎ込まれるという、雌の至福に酔い痴れた。少しでも多くの噴液を受け止めようと、本能のままにお尻を高々と持ち上げ差し出す体勢を取った。それでも溢れ出した白濁が、わなわなと痙攣するミルク色の生脚を、泡立ちながら流れ落ちていく。

ぶちゅっ……ごぼぼっつ……ぶちゅっ、ぶびゅっ……。

「緋緒っ、俺、俺っつ……おおお……緋緒っ緋緒っおおおおっつ……！！」

「あああああっつイっくっイっくううっつ、エロ種付けされてっおおおおっつ私っ雌っ……んおおおおんんっつ……！！」

泥棒猫を見つけた本妻さながらに怒り狂う年下のボスに、しかし美貌の部下は全く動じずに微笑んで開き直る。

「ああ、それですか？ それは……ねえ？ うふふつ、お嬢様。別に私と小机くんの間は何があったって、構わないでしょう？」

「良くないつつ、いくら凛々亜でも、そんな勝手な真似許さないんだから！」
激怒する主人に対し、切れる有能秘書は悪びれる様子もなく質問を返した。

「それはつまり、小机くんがお嬢様の恋人になったから駄目ってことですか？」

「ち、違うつつ恋人なんかじゃないつつ、でもつつ、コイツは……!!」

「お嬢様。恋人じゃないなら、私と彼がどうしようと勝手じゃないですか」

「うううつつ、ぐぐつつ……でも、でもつつ……うううつつ」

自分の性格を知悉している巨乳秘書に、緋緒は反駁しきれなかった。凛々亜はそんな彼女の手を離すと、ミツルの頭側に来て、目を覗き込んでくる。

「それじゃあ……恋人じゃない小机くん、私にもご褒美お願いしますね。私だって昨日、会社でお二人のサポートを頑張ったんですから、ご褒美貰う権利ありますよね。私、前から頑張る小机くんってステキだと思ってたんですよ」

頬を少し赤らめ、暗紅色の唇を妖艶に歪める。猫か何かと遊んでいる時のように、わざとらしく視線を流して挑発する。そんな彼女に、諦めの悪いお嬢様はヤケになって食って掛かった。何とか引き止めようと、スーツの袖を思いっきり掴む。

「わあああああつつ駄目駄目だめええつつ!! 駄目なものは駄目なのつつつ!!」

凜々亜は、半泣きで必死の形相の主人に、やれやれとため息をついた。

「ふう。本当に仕方のないお嬢様。いいですか……欲しいものがあるなら、ちゃんと一言ない。意地を張ってばかりじゃ、気持ちなんて分かってもらえませんよ」

（それって……やっぱり緋緒は……）

ミツルが下から見上げると、少女社長の桜色の唇は悔しげにひきつり、眦に涙を浮かべた目には不安と怒りと嫉妬と、様々な感情が乱れて複雑な輝きを放っている。

「ううう……うう……」

「さあ、お嬢様」

しかし緋緒は肩を震わせ、目をぎゅつと瞑ると、頑なに言い放つのだった。

「コ、コイツは……私専用なの! コイツは私専用のご褒美係! だから凜々亜は使っちゃ駄目っつ」

あくまで意地を張るその言葉を聞いて、ミツルはがくつと来た。一方、凜々亜は。

「ああもう、なんて我が儘なのかしら。いいですわ、お嬢様がそこまでおっしゃるのなら、私にも考えがあります。覚悟してください」

大げさに呆れてみせてから、主人を押し倒すようにのしかかった。

「ちよ、ちよつと凜々亜つつ何するのよっ……きやつ……えっええっ!」

彼女の雌豹のごとき動きに狼狽する緋緒。ミツルの上から引きずり下ろされ、仰向けに

ひっくり返されて、ようやく暴れ出すが既に時遅く、

「やだっつやめなさいっ凜々垂っつ私に何するのよっつ！」

巨乳秘書に背後から両足首を掴まれて、身体を曲げ、上げた両脚をVの字に開くような屈辱的な体勢を取らされてしまっていた。さらにショーツをずらされて、濡れ状態の秘花がちょうど身体を起こしたミツルの正面にさらけ出されている。

「聞き分けのないお嬢様には、お仕置きして差し上げます……小机くん」

「え……は、はいっつ？」

女教師のような威厳の籠った声で命じられ、ミツルの声は裏返ってしまう。

「お仕置きに協力してください。そうですね……私がいいって言うまで、舐めてあげてください。お嬢様がイイって言ってもやめちゃ駄目ですからね」

（お仕置き？ 俺がするの？ 緋緒にす……やべ、なんかドキドキしてきた……）

「な、何がお仕置きよ！ アンタたち、自分の立場を弁えなさいよっ！」

破廉恥な姿勢を強いられながら怒り狂う愛しい少女の姿に、青年は可哀想という感情を抱いたが、同時に虐めてみたいという誘惑を強く強く感じていた。彼は身体を起こすと、心の命じるままに、少女の剥き出しの羞恥器官に顔を近づける。

「やっやだっ、こんな格好っつ、やめてっやめないと後で……ひぁうっつ！」

お嬢様の震える浮唇を一舐めする。彼女にとって口唇での愛撫自体は経験済みだが、し

かし今は第三者に見られているうえ、身体を戒められているという状況なのだ。舌の刺激に反応して、彼女の腰が恥丘をぶつけてくるかのように跳ねる。淫唇の奥からびゅつと蜜液の雫が吹き出す。

その著しいリアクションに勇気づけられて、ミツルは大きく舌を出して、秘花を広げるようにしてゆつくりと舐め吸い始めた。

ちゅぷ、れるっ、れるれるるっ……。

「ひっああっんっ、やだっっああっ……こ、こんなのっどうにかなっちやうっんっ……ああっああんんっっ」

拘束されたまま、緋緒はいいやをしつつも嬌声を上げる。そんな主人の姿を愛おしげな視線で眺めながら、凛々亜は淫らな指示を追加した。

「小机くん。舐めるとき、もっといやらしい音を立ててあげてください」

「あ、はい……」

指示されるがまま、ミツルは唇を微妙に浮かせて吸引しつつ、舌のくねりにわざと無駄な動きをつける。少女の下腹部で品のない吸引音が響き始めた。

ぢゅぶるっ……ぢゅるるるっ……ずじゅぶりゅりゅるるる……。

「ちよ、ちよつと……あああああつっ、やだ、そんな音っおとおつ……」

一方の巨乳秘書は、羞恥と怒りと快感に震える主人の耳に、甘い淫毒を囁く。

「凄い音……お嬢様ったら、随分と濡れていたみたいですね。いつものパワフルな経営者

は見せかけで、本当はこんな淫乱娘だったなんて」

日頃のオフィスでは自分を支えてくれている部下からの言葉責め。心の性感帯を突き刺されたのか、緋緒は恍惚とした悲鳴を上げた。

「やつやだつそんなのないうあああ……そんなつ、私つそんな淫乱じゃないっあ
おおおつ……おおおつ音つ、えっちな音立てないでええつ」

ぢゅぢゅぢゅるるるつ……ぢゅううううつ……

しかし、エロ社員はさらに大きな音を立てていく。吸い込みながら首を大げさに振って、被虐快楽に開眼しつある少女社長に音と視覚でアピールする。

「あらあら、もつと濡れてきたんですか？ いやらしい身体なのを指摘されて……お嬢様
つたら、淫乱なうえにマゾなのかしら？ 本当にしよわない人ですね」

主人の興奮を掻き立てるべく、凛々亜は濡れた唇から追い打ちをかけるように囁く。

「あああああ……違うつちがつ違うつつ私つおおおおつ……マゾつ、マゾな
んかじやつ……虐められて気持ちよくなつたりなんかつとおおおつ」

だが、必死に否定しようとする彼女の声色は、すっかり発情時のそれに変わっていた。
ミツルの舌の上にも、その証拠の熱く甘い蜜がどんどん溢れ出てくる。

（ああ、ごめんよ緋緒……でも……虐められて喜んでる緋緒も……可愛いよ。緋緒が可愛
すぎて俺、そろそろ限界かも……もう入れさせてくれても……）

既に彼のペニスはズボンの中で痛いほど膨れ上がっている。

「ふふふつ、こんなに夢中になって……私たちに二人がかりで虐められるの、すっかりお気に召したみたいですわね。淫乱でマゾな緋緒お嬢様」

「そんなのっ違うつっ、私っ、私こんなのっ氣に入ってなんてっ……あああつっ」

被虐快感の奔流にもみくちやにされながら、辛うじて意地にすがりつく緋緒。そんな彼女の態度に、凜々亜は意地悪く笑う。

「あら、まだ意地を張るんですか？　そろそろおチンポを差しあげようかと思つていたのに、仕方のないお嬢様。じゃあ、マゾで淫乱な雌だつて認めるまでおチンポはお預けですね。小机くん、そのまま続けて。いつても止めずに続けてね」

「あつああつそんなあつつつやだつ欲しいのにつつおおつああああつつ」

緋緒は無慈悲なお預け宣言に、腰を切なげにくねらせ抗議した。その様子にミツルの興奮は弥が上にも掻き立てられ、淫肉をなぶる唇と舌の動きが加速する。

れるるるるるるるっ……じゅるっ、ぢゅびゅるるるるっ……。

そうして、彼の舌が肉芽の下の小きなくぼみをくすぐった時、緋緒の腰がびくんと大きく跳ねた。同時に哀切な声色の懇願が耳に届く。

「あつ駄目っだめっ、そこっつ、お願いっつそこだけはっやめてっつ……で、で、出ちゃいそう……なのっつ……だから、お願いっつ……そこはっ……んんっ……」

そんな彼女の様子に、凜々亜は眼鏡の下で妖艶に微笑んだ。そして、優しげな口調で我が儘なお嬢様への恥辱刑を宣告する。

「あらそうでしたか、お嬢様……それはちょうどいいですね。小机くん、そこ、尿道口を徹底的に責めてあげてください。お漏らしでイかせちゃいましょう」

「あつああああつ、そんなのつつやだつやだつ駄目つつ……お願いつつそれは駄目つ、そんな恥ずかしいのつつお願いつ凛々垂つつあああああつつつ」

部下二人に責められたうえ、失禁の醜態を晒させられる。そんな堪え難い羞恥快楽を予告されて、少女は悲痛な叫び声とともに手足をばたつかせた。

（あの、もしもし？ お漏らしして……それ、俺直撃されるんですが……あ、でもちよつと見てみたい、かも……緋緒が可愛くお漏らしでイつちやうところ……）

一方ミツルも、力の入らない身体で哀れに身悶える彼女の様子に、汚いとか可哀想といった感覚は消し飛んで、すっかりやる気になってしまっていた。

つつ、つつつつん……れるれるれるれるるるるるつつ……。

突き出し尖らせた舌の先端で、小さな肉のくぼみを何度もノックする。それからくすぐり、回転させてこじ開けようとする。そのたびに痺れるような愉悦が少女の身体を駆け抜けていった。それに加えて、失禁絶頂への恐怖と被虐的な期待感というスパイスが、お嬢様の快感を否応無しに増幅していく。

「ひっあつああつ、だっだめっつお願いつあああつそこっお願いつつやめてつつ」

するとエロ社員は、少女社長の懇願にカウンターを浴びせるかのように唇をすぼめると、尿道口のあたりを覆い、思いっきり吸引した。

ぢゅるっ、ぢゅっ、ずぢゅうううつつ……!!

「やつああっ……ひああああ……あああああつつ……!!」

惑乱状態のお嬢様の耳元で、巨乳秘書が淫らかな声色で囁く。

「ほら、小机くんも飲みたがってますよ。緋緒お嬢様の絶頂おしっこ……どんな淫乱な味がするんでしょうね? ふふふっ」

(えっ、いやあの飲みたいとは……まあでも、少し位なら飲んでも……)

彼女の責め言葉に、これから自分が受ける恥辱を連想したのか、緋緒は身震いしながら絶叫した。しかしその声には、墮とされる快楽への期待が色濃く浮かび、もはや拒絶の意思はほとんど残っていない。

「いいいやあああつつ、だめっ飲んじやだめっあっあああっ味わつつちゃっ……あああつつ、おしっこ駄目っ気持ちよくなっちゃ……おとおおつつ……!!」

叫びながらぐくぐくと腰を震わせ、屈辱的な悦楽を求めて腰を突き上げる。れるっ、れるれるるるつつ……。

そんな彼女の秘肉のくぼみを、再び舌先のドリルが掘削したときだった。必死で抵抗していた括約筋が不意に緩み、

「あおっおおおつつ……だめっ、もうっもう私っあああああつつ……!!」
ちよろっ…。

ひと際甲高い悲鳴とともに、熱い液体が一雫、舌先に当たった。そして。

しやつ、ぷしやつあああああつつつつつ……。

彼は熱湯を顔面に浴びせられたかと思った。ついに彼女が絶頂したのだ。

（んんっ、んぐっ……緋緒、緋緒がイったんだ……ああ、苦くて、塩辛いけど、美味しい……ような気がする……んんんっ……）

立ちこめる芳香をミツルは生臭いとは思わなかった。口を大きく開いて迸る熱泉に吸い付き、最初の海水のように香しく苦い絶頂の証を飲み干していく。

「あああああつつ、出るっ出ちやつてるのおおっ……おしっこっ、見られながらつつおしっこっ……おおあああつつだめっ、あああああつつ飲んじやつつあああああつつ……!!」

部下二人の前で、無様な失禁絶頂を曝け出したという恥辱に、緋緒はぎゅっと目を瞑り、涙を流しながら身悶えた。

「可愛い……ああ、なんて可愛らしいのかしら、お嬢様……ちゅっ、ちゅっ……」

被虐快楽を受容した主が身悶えする様に、凛々亜はうつとりとした声を漏らすと、背後から震えるうなじに、耳に、頬に、情愛のキスを降らせていく。

「気持ちいいのっ、おしっこっおおおおっ……駄目なのにつ、気持ちいいっおしっこエッチっ気持ちいいのおお……おおおおおつつつつ……!!」

引き締まった両脚を、お腹を痙攣させる。性愛器官をひくつかせて、青年の口腔にとめどもなく屈服の証を迸らせ続ける。長い睫毛を震わせ、朱に染まった頬に陶酔の涙をこぼし、亜麻色の髪の毛を振り乱しながら、誇りも身分も忘れてあられもない言葉を叫ぶ。そ



の痴態にミツルもまた恍惚感を覚えた。

（可愛い……ああ、すごく可愛いよ緋緒……俺、俺もう我慢できないよ……）

+

「……はあ……はあ……おしっこ、しちゃった……うう、ああ……」

部下二人に責められての屈辱絶頂経験に、放心状態で弛緩する緋緒。その身体を、凛々亜が後ろから抱き直した。

「ふふっ、お嬢様ったら、彼に虐められてこんなに……」

「ひっ……り、凛々亜っ!?……ど、どこ触って……あっ、あんっ、止めてっ……」

緋緒がうわずった声を上げる。凛々亜の指が秘部に這い込んだのだ。口先では巨乳秘書に触れられるのを嫌がっているようだが、しかし興奮状態が続いているせいか、抵抗らしい抵抗はせず、欲情粘膜をなされるがままにかき回されていた。

「凄……い……こんなにぬるぬる……ほら……」

凛々亜は指を引き抜くと、緋緒に見せつける。彼女の人差し指と中指は、付け根まで少女の粘液でぬらつく輝きを放っていた。

「や、やだ凛々亜……そんなの見せないでよ……あ……う、うんっ、んむむっっ」

発情の証拠を見せつけられて羞恥する乙女は、しかし濡れた指を口元に突きつけられると、促されるがままに口を開き、自分の粘液を舐めとっていった。

ちゅぶっ、ちゅぱっ、ちゅるっ、ちゅ……ちゅぽん……。

やがて巨乳秘書は、主人の欲情唇から音を立てて指を引き抜き、呼びかけた。

「ふふ、お嬢様だったらようやく素直になって、可愛いわ……それじゃ次は、ちゃんと彼のをあげましょうか。小机くん、ズボン脱いでこっちに來て」

ようやくと出番とばかりに勃起海綿体を開放する青年。そんな彼に、どこから取り出したのか、薄く小さな正方形の袋が差し出された。

「じゃあ、これ着けてください。今日はお嬢様は危険日の筈ですから」

ミッルも避妊具の装着に異論はなかった。むしろ今までが成り行き任せすぎたのだ。

そうして、それを手早く装備した青年に、巨乳秘書が仰向けになるように促す。彼女の手から解放された緋緒も、もじもじと切なそうにしている。

「お嬢様、彼が恋人なら私も遠慮しますけど、でもそうじゃないんですね。それなら混ぜてもらわないと……小机くん、私にもご褒美よろしくね」

そう言うのと、凜々亜は手早くスカートとショーツを脱ぎ捨てて下半身だけ裸になり、ミッルの顔面に跨がってきた。芳醇な香りとともに熱い粘液を滴らせた、複雑な軟体動物のように発達した肉唇が目の前にのしかかってくる。

「うおっ……ええと……じゃあ、いいですか……」

緋緒の前で多少気が引けないでもなかったが、この状態では抗いようもない。ミッルは舌を伸ばして眼前の熟雌肉から滴る淫蜜を舐めとり始めた。

「あふっ、んっ、いいわ小机くん……はぁっ……お嬢様、そちらにどうぞ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

<http://ktcom.jp/>

検索

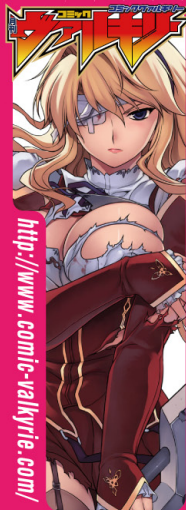


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお楽しみBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!